

アントニオ・ブエロ・バリェホの 『バルミー博士の二つの物語』にみられる国家権力と抵抗

岡 本 淳 子

要 旨

スペインの劇作家アントニオ・ブエロ・バリェホが1964年に執筆した『バルミー博士の二つの物語』は拷問が存在する社会を描く。本作品で警察の拷問に焦点を当てるブエロの意図が、国家権力の実像の提示と批判であることは容易に察せられる。しかし、作者は直接的に国家権力を攻撃するのではなく、登場人物の様々な権力関係を描き、権力関係が逆転可能であることを示唆することで国家権力への抵抗の可能性を提示する。

本論の目的は、『バルミー博士の二つの物語』における登場人物間の権力関係を分析し、権力関係の逆転を可能にする要素を明らかにするとともに、作品内に描かれる暴力を考察し、暴力を行使する国家権力とその抵抗の関係を明らかにすることである。

まず、家父長制を基調とする権力関係において主人公が被るジェンダーアイデンティティおよびセクシュアリティの抑圧を考察する。そして、彼女が警察での拷問についての真実を知ることにより、姑および夫との関係が逆転すること、すなわち無知から真実の認識への移行が権力逆転の動機となることを提示する。

次に、無知こそが拷問の共犯者を作り出し、現実逃避、現実否定する者たちが国家権力への抵抗を不可能にすることを見ていく。

続いて、警察での拷問実行者たちに焦点を当て、権力行使の手段としての暴力を考察する。支配する側、抑圧する側は、自らの暴力行為を正当化するために攻撃する相手に「病気」あるいは「非人間」という印をつける。正当性は元来あるものではなく、後から構築されるものである。

最後に、暴力と抵抗との関係を見る。「権力のある所には抵抗がある」というフーコーの言葉どおり、権力行使は自ら抵抗を作り出す。その抵抗が有効なものとなるためには、権力行使される側がシステムに取り込まれることなく真実を認識することが重要になる。主人公メアリーによる夫殺しは国家権力が作り出した抵抗であり、国家権力のシステムから抜け出せない歯車としての夫を殺すことは、法と密接な関係にある国家暴力に亀裂を入れることになる。

キーワード：権力、抵抗、家父長制、真実の認識、暴力

1. はじめに

スペインの劇作家アントニオ・ブエロ・バリェホ（Antonio Buero Vallejo）が1964年に執筆した『バルミー博士の二つの物語』（*La doble historia del doctor Valmy*）は拷問という暴力が存在する社会を描く。本作品はフランコ独裁政権¹⁾に国内で上演されることはなく²⁾、本国での初演は1976年の1月を待たなければならなかった。政府の検閲局が拷問をテーマにした本作品を独裁制国家を告発する作品と判断したであろうことは想像に難くない。

本作品で警察の拷問に焦点を当てるブエロの意図が、国家権力の実像の提示と批判であるこ

とは容易に察せられる。本作品の多層的な物語構造が国家によるイデオロギー操作を可視化することはすでに別の場所で論じた（岡本 2004）。本論においては物語構造ではなく登場人物の人間関係に焦点を当て、個々の権力関係が変化することに注目しながら本作品に描かれる国家権力とその抵抗について別の角度から考察する。

まず、『バルミー博士の二つの物語』における登場人物間の権力関係を、それぞれの関係を成立させる社会的要因、とりわけ家父長制の強制するジェンダー／セクシュアリティ規範との緊密な関係から分析する。さらに身体に及ぶ暴力について考察し、主人公の女性がなぜ夫を殺さなければならなかったのかを問いながら、暴力を行使する国家権力とその抵抗の関係を明らかにしたい。

2. 家父長制社会が基調となる権力関係

主人公のメアリー（Mary）はどのような女性なのか。精神科医バルミー（Valmy）博士との会話から、彼女が妻そして母になることこそ女性の幸福であると考えていることがわかる。つまり、妻そして母であることのみを女性のアイデンティティとする家父長制的イデオロギーに彼女は支配されている³⁾。メアリーは恋人の戦死により、妻そしていずれは母になるという期待を裏切られる。一度は結婚することをあきらめ、教師として生徒を自分の子供と思い教育することに全力を注ぐ。上野千鶴子は『家父長制と資本主義』のなかで、「ロマンチック・ラブは『父の権力』から娘を解き放つかもされないが、その代わり『夫の権力』のもとへと、女をすすんで従属させる」（2002: 58）と論ずる。メアリーの場合、恋人が提供すると思われた「夫の権力」への従属が不可能となったため、父と同居することで「父の権力」へと戻る。しかし、彼女はオールドミスと呼ばれる年齢まで独身であるということ、すなわち家父長制社会において逸脱した存在であることに苦悩する。そして、父の死によって「父の権力」が終わると、帰属する場所を失い、神経症を患う。ブエロの研究者Jean Cross Newman⁴⁾は、メアリーは彼女の恋人に与えられた将来の希望、つまり妻・母としての安定した役割への期待を彼の戦死によって奪われ、生きる意味を失うが、念願の安定したアイデンティティ（妻と母）をもたらすダニエルとの結婚に救われると指摘する（1992: 63）。バルミーも夫のダニエル・バーネス（Daniel Barnes）もメアリーの神経症は治療によってだけではなく、結婚によって治癒したのだと言う。家父長制が規定する「夫の権力」と従属関係を結ばなければ逸脱者になるという強迫観念がメアリーに神経症を引き起こし、結婚によって夫と従属関係を結ぶことで病が治癒したとされる。

しかし、結婚と出産によってメアリーは幸福を手に入れたのか。彼女は夫ダニエルの母親と同居しているが、「祖母（Abuela）」と呼ばれる義母との関係が彼女のアイデンティティを不安定にする。幕が上がると観客は、「祖母」が孫のダニエリート（Danielito）に物語を語り聞

かせている場面を見る。それは、「祖母」が息子ダニエルの幼少時によく語り聞かせた「ダニエリートの物語」⁵⁾であり、「隊長さんのように強くて大きく」,「ハンサム」で、「性格もすごく良い」,「とっても賢い」(58)⁶⁾ 息子を溺愛する母の物語である。髭が生え、大人になった息子とまるで恋人同士のように世界中を旅するという物語は近親相姦的な愛情を含んだフィクションである。「祖母」は息子の身の回りの世話を妻のメアリーに先んじて行い、息子夫婦が仲睦まじいことに嫉妬する。「祖母」はメアリーの妻としてのジェンダーロール(性別役割)を奪おうとしている。さらに、孫のオムツを替えたりミルクを作るなどの仕事も率先して行う。つまり、メアリーは「祖母」によって、妻、そして母としての仕事を奪われ、ようやく獲得した妻、母というアイデンティティを脅かされる。「祖母」とメアリーはダニエルとダニエリートをめぐって権力関係にあり、メアリーの妻・母としてのアイデンティティを不安定にすることで「祖母」が優勢になっている。「祖母」はメアリーがすでに教職を辞しているにもかかわらず、いつ育児休暇が終わって学校に復帰するのかと尋ねる。彼女はメアリーを排除し、ダニエルとダニエリートの三人で暮らしたいと望む。メアリーは家庭という安住の場所をようやく獲得したにもかかわらず、排除という権力行使に脅かされる。

メアリーはジェンダーロールの剥奪や家庭からの排除だけではなく、セクシュアリティ(性的欲望)の抑圧も受けている。夫ダニエルは政治犯の容疑者に男性性器去勢の拷問を行った結果、自らが性的不能に陥る。それによってメアリーとダニエルの性生活は抑制されることになる。しかし、それ以前にすでに彼らの性生活は抑圧されている。その原因のひとつは「祖母」の存在にある。ほとんど家から出ない「祖母」は常に息子夫婦を監視する。彼女は耳が遠いとされているが、実際に聞こえていないかどうかは疑わしい。聴覚障害を口実にして息子夫婦を監視している可能性もある。一方、ダニエルも息子を溺愛する母親に対して異常なほどの愛情をもっており⁷⁾、そんな中でメアリーは性的欲望を自由に表現することができない⁸⁾。加えて、時間的な制約もメアリーの性行為を抑制する要因となる。拷問は夜中に行なわれるため、ダニエルの身体は警察によって長時間拘束され、夫婦二人だけの時間はほとんどない。このように姑の監視や夫の不在が、夫が性的不能に陥る前からメアリーの女性性を抑圧していたのである。

家父長制においては女性のセクシュアリティは常に男性の劣位にある。性的不能となったダニエルは妻のために治癒することを目的として別の女性と寝る。それでも男性機能が正常に戻らないダニエルは、妻に「妹」として生きてほしいと頼む。『ジェンダーと権力 セクシュアリティの社会学』の著者ロバート・W・コンネルによれば、「男性には相手を選ばない^{セクシュアリティ}性行為を許すが女性にはそれを禁じるという『二重基準』は、(中略)権力をもつ側にすべてがあることを物語っている」(1993: 180)。メアリーが被っている性的欲望および性行為の抑圧は、夫婦の権力関係において夫が優位にあることを示す。性行為のできない夫を持った妻はなぜ「妹」として生きなければならないのか。ダニエルが不能になった原因を解明しようとするバ

ルミーは、ホモセクシャルな誘惑を感じた経験、あるいは女性と普通の終わり方をせずに快楽を得た経験の有無を尋ねる。ホモセクシャルや快楽を得るための性行為は異常とみなされ、正常な性行為は再生産、すなわち子供を作るための行為でなくてはならない。上野によれば、「人々は再生産をめぐる権利・義務関係に入り、たんなる個人ではなく、夫／妻、父／母、親／子、息子／娘になる。この役割は、規範と権利を性と世代とによって不均等に配分した権力関係であり、フェミニストはこれを『家父長制 patriarchy』と呼ぶ」(2002: 25)。性交渉が成立しない夫と妻のあいだに、もはや夫／妻という「再生産をめぐる権利・義務関係」(上野 2002: 25)は成立せず、兄／妹関係に置換される。

家父長制を基調とする権力関係において、メアリーのジェンダーアイデンティティおよび女性性が抑圧されていることを見てきたが、この権力関係は徐々に変化する。ミシェル・フーコーは権力の「不断の変化という規則」を説く(1986: 127)が、本作品に描かれる権力関係も様々な要因によって変化する。まず、メアリーを中心に「祖母」、そしてダニエルとの権力関係の優劣の変化を見ていく。

3. 真実の認識による権力関係の逆転一家父長制的規範の崩壊

性別役割の明確な家父長制においては、妻は夫の仕事に関して無知であって当然である。メアリーは夫が警察署の政治部所属ということ以外知らされていない。昔の教え子であるルシーラの訪問で初めて、政治部で非人道的な拷問が行なわれている事実を知る。それでも、夫が自ら拷問に手を下しているとは信じず、「無理やり共犯者にされている」(98)と考える。

ここで重要なのは、メアリーと、彼女に大きな影響を与えるルシーラとの関係である。ルシーラは何年も前に卒業し、メアリーもすでに教職を離れているが、教師と生徒という二人の関係は変わらない。学校において教師は生徒の行動を監視する支配的な立場にいる。メアリーは彼女を先生と呼び続けるルシーラに、「私たち、もう生徒と先生なんかじゃないわ。今は幸せな友達同士よ」(82)と言い、同等であろうとする。しかし、その後ルシーラが警察の拷問についての事実を伝えると、その件に関して全くの無知であったメアリーはルシーラとの関係において劣位に置かれる。逮捕された夫が何十日も拷問を受け、病院に運び込まれたと涙ながらに語り、助けを求めるルシーラとそれを慰めるメアリーという関係が、ルシーラが警察での拷問の実態を生々しく語ることで大きく揺れる。動揺したメアリーは「座りなさい！」(85)と教師の口調でルシーラに命令し、彼女の肩を乱暴に押して座らせる。メアリーは二人の関係を教師と生徒の関係に戻し、身体的抑圧によって権力の逆転を阻止しようとする。また、「ルシーラ、お医者さんに診てもらったほうがいいわ」(85)と、相手を精神異常者として扱うことでも優位に立とうとする。ルシーラは拷問の実態を信じようとしないうメアリーに、彼女自身も警察に呼ばれ、夫の前で強姦⁹⁾された事実を打ち明ける。するとメアリーは平手打ちという身

体的暴力によってルシーラに抵抗する。突然泣き出すメアリーにルシーラは、「先生！何が悲しくて泣いているのですか？無知だったことがですか？（中略）いったいどちらが大人でどちらが子供なのかわからないじゃないですか？」(86)と軽蔑的なまなざしを向ける。メアリーとルシーラの権力関係は真実を知っていることによってルシーラが優位に立つ。

その後、ルシーラが送ってきたと思われる拷問の歴史の本と、ダニエル自身の拷問への関与の告白により、メアリーは精神に異常をきたす。第一幕の最後、「祖母」がダニエリートのおムツを替えながら、「いっぱいおしっこするから、おちんちんがひりひりするんだ」(100)と言うと、メアリーは去勢という拷問の犠牲者と息子を同一化し、身の毛のよだつような悲鳴をあげ、ひきつけを起こす。そして、「強制収容所で小さな足をもぎ取られたその男の子はどんなに叫んだことでしょう！」(100)と言い、さらに悲鳴を上げて失神する。男の子の小さな足は男性性器を象徴し、ここでも去勢への恐怖が示される。メアリーが何度も見る夢のなかでは、ダニエリートがすでに去勢されて女兒ダニエラになっていたり、夫ダニエルがダニエリート性の器をはさみで切り取ろうとするのをメアリーが必死に止めたりする。メアリーは息子だけではなく、自分自身も拷問の犠牲者と同一化するようになり、その恐怖は悲鳴となって表れる。犠牲者と同一化したメアリーにとってダニエルはもはや夫ではなく拷問の執行者にすぎない。メアリーは夫に対する感情を「他人のように感じるときもあるし・・・恨みでいっぱいになるときもあります。奇妙なことです、時々（中略）あの人のことを笑い者にしたくなるのです」(112)とバルミーに語る。従属すべき家父長ダニエルが今では他者となり、軽蔑する存在にまでなっている。メアリーは夫婦の営みを回復する努力もやめ、もはやダニエルの妻であり続けることを望んでいない。

夫に対する恐怖心と嫌悪感は彼女の母性にまで影響を与える。「もう一人子供が欲しいですか？」と尋ねるバルミーにメアリーは、「子供をもう一人この世に送り出すような勇氣はありません」(112)と答える。拷問の犠牲者になり得る息子を生んだことを後悔するメアリーは、新たな生命を生み出さない決心をする。その決心は彼女の夢の中で象徴的に描写される。メアリーが電気スタンドをつけようとひもを引っ張ると、体に電流が流れ、ひもを放すことができなくなる。彼女の助けに応じてダニエルがハサミで彼女の指を切り落とすが、メアリーの手からは出血がない¹⁰⁾。女性の身体から流れる血を経血と結びつけて考えることは自然であろう。出血しないメアリーの手は、もはや月経がない、すなわち子供を産むことができないことを象徴する。経血がないことでメアリーは物理的に子供が生めないことになり、産む性としての責任放棄を自らの意志によるものではなく、不可抗力として正当化する。

メアリーが新しい命をこの世に送り出すことを拒む背景には、人々を否応もなく拷問する側とされる側に分類する社会の構造がある。新しい命をこの世に送り出すことは拷問者を生み出すことにもなる。彼女は「息子の顔に主人の顔がだぶって見えるのです。それは死刑執行人の顔なのです」(116)と言い、息子ダニエリートが拷問の実行者になる恐怖を訴える。子供を産

むことを放棄したメアリーは将来の犠牲者も拷問者も生み出さないという点で、無意識にはあるが拷問を実行する国家に抵抗している。

メアリーは拷問についての真実を知ることで、結果的に妻としてのジェンダーロール、および新たに母となる役割を放棄し、家父長制のイデオロギー支配から解放される。しかし、そのイデオロギー支配は家父長である夫ダニエルによってなされていたわけではない。ダニエルはバーネス家の家父長ではあるが、実際にはそれほど支配的とは言えない。しかも、彼の家父長としての立場は性的不能に陥ることで危うくなっている。「僕の辛抱強い、献身的な妻」、「お前は僕をものすごく理解してくれてたし、とつても寛容だった。これからもそうしてほしい」(129)と従順な妻を賞賛し、彼女に従属的立場を維持してもらうことにより、かろうじて家父長の座に留まっているにすぎない。バーネス家において家父長支配を成立させていたのはメアリー自身だったのである。そのメアリーが家父長制の規範から逸脱し、その維持を放棄するとき、ダニエルは象徴的に置かれていた家父長の座からおろされることになる。

夫の権力に従属するのをやめたとき、メアリーに残った母としてのアイデンティティはバランスを欠いた歪んだものとなる。メアリーは息子ダニエリートは自分だけのものだと繰り返す、ダニエルに息子には近づくなと言う。夫ダニエルが「これは僕の息子だ！そしてお前は僕の妻だ！」(129)と叫ぶとき、彼らは所有権をめぐる権力関係にある。息子に対するメアリーの異常なほどの愛情、所有願望は、「祖母」のダニエルに対する愛情とまさしく同一のものである。

4. 拷問の共犯者と国家権力への抵抗

ダニエルの幼少時に夫を亡くした「祖母」にとって家父長である夫は存在しない。「あらゆる犠牲を払った母子家庭の母は、子供に対する支配を強めようとする」ことが多く、「家父長制下でより抑圧された者が、さらに抑圧された者を抑圧するという悲劇的なサイクル」が存在すると上野は指摘する(2002: 105)。女手ひとつでダニエルを育てた「祖母」は、経済的な理由から息子を警察に勤めさせる。上野が指摘する家父長制下での母子家庭の母のタイプと同様に、「祖母」は息子ダニエルに対して支配的であり、家庭や職場での彼の行動を左右する力を有する。彼女は息子に、「おまえはまだ若いんだから、いつだって好きなようにしていいんだよ。大切なのはおまえが幸せになることだ」(111)と言うが、実際には彼の警察勤務をやめさせるつもりはない。息子が拷問に関与し、精神的に衰弱しているのを見ても見ぬ振りをする。拷問という非人道的な行為が息子の身体に与えているダメージを単なる頭痛とし、鎮痛剤「フイヌス」を飲ませて治そうとする。メアリーが警察での拷問やその重圧に耐えかねてダニエルが病気になっている事実を伝えると、「祖母」の耳は聞こえなくなる。「祖母」は先に見たようにメアリーとの権力関係において優位にあったが、普段隠している良心の呵責を刺激され、劣

位に追い込まれる。その時彼女は聴覚障害という身体の不自由によって権力の逆転を阻止しようとする。真実を知ることによって優勢になったメアリーに対し、「祖母」は難聴になり、無知を装うことでその逆転を無効にしようとする。

「祖母」や冒頭に登場するブルジョアのカップルのように「自分が住んでいる世界を知らないでいることを決め込んだ人間が何百万といる」(131)とバルミーは嘆く。ブエロの研究者であるLuis Iglesias Feijooは、「無責任と咎められるべき無知という狂気こそが本作品が最も直接的に非難しているものであり、現実には拷問の存在はそれを許す社会の意志によって説明される」(1982: 335)と論じる。ブエロは拷問が存在する社会を作るのは拷問者だけでなく、現実から目を背ける者、現実を否定する者が共犯者となることを訴える。

人はなぜ目を逸らし、沈黙するのか。拷問者／犠牲者という対立によって体系化された独裁制社会において、そのどちらかになることから逃れるためには「祖母」のように現実から目を逸らすか、あるいはカップルのように現実を否定し幻想のなかに生きるしかないのかもしれない。無知を装うこと、あるいは沈黙を守ることがひとつの自己防衛手段となる。しかしながら、今まで見てきた権力関係でも明らかのように、無知が真実の認識に勝ることはない。本作品の劇構造に大きくかかわるカップルは真実を隠蔽し、バルミーの物語を全面否定する。無知を装うことに麻痺し、もはや真実を否定することしかできなくなった彼らが、権力関係においていかなる抵抗力も持ち得ないことが、バルミーとの関係において明らかにされる。

第一幕、幕が上がる前に、イヴニング・ドレスの婦人とタキシード姿の紳士が舞台両袖から登場する。その外見から司会者あるいは口上人と見なされる二人は、これからバルミー博士が語る拷問の物語は作り話であるから、決して深刻になってはいけないと観客に訴える。カップルの言葉は、現実に行われているスペイン社会での拷問¹¹⁾を隠蔽し、国民がその事実を追及することを阻むものである。バルミーが秘書に口述筆記させる物語を全面的に否定するカップルの口上は、拷問を隠蔽する国家的なイデオロギーと捉えられ、国家権力を象徴する。ところが、ブルジョアのカップルが実は口上人などではなく、バルミー博士の患者であることが第二部の後半になって明らかになる。第二部終盤、メアリーがダニエルに銃口を向けるクライマックス・シーンで再び登場するカップルは、「ありそうもない話で私たちの神経をずたずたにしようというのですか」(131)と博士を非難し、バルミーの物語のフィクション性を再度強調する。しかし、今回彼らは看護師によって無理やり退場させられる。その時、彼らがバルミーの患者であり、バーネス家の物語の前に語られた「最初の物語」の主人公であることが明らかになる。国家権力を象徴すると思われた言葉は、博士が語る物語内の精神病患者の言葉だったわけである。バルミーの物語を全面否定するカップルが、バルミーの物語のなかに取り込まれ、しかも第二部で再登場した時には、バルミーの合図で強制的に退場させられる。カップルとバルミーの権力関係の優劣は逆転し、バルミーが圧倒的優位に立つ。

この権力関係は国家のイデオロギー装置を可視化するものであり、劇構造の逆転は作者ブエ

口の国家権力への戦略的な抵抗を示す¹²⁾。

5. 拷問者のジレンマ—脱出不可能なシステム

ダニエルの身体は国家権力機構のひとつである警察によって昼夜を問わず長時間拘束されている。ほとんど外出しない「祖母」は現実逃避の手段として一日中テレビドラマを見て過ごす。対照的にダニエルにはテレビを見る時間がほとんどない。彼は誰もが知っている鎮痛剤「フィヌス」のコマーシャルソングさえも知らず、テレビというメディアからの情報は絶たれている。また、長時間の拘束により、警察からの限られた情報しか得られず、イデオロギー操作をされやすくなっていると言える。

ダニエルが所属する政治部では、政治犯の検挙に多忙を極めている。国家の敵である政治犯とはいったい誰を指すのか。植民地支配などにおいては異なった人種・民族が、階級闘争においては異なった階級の者が敵となり、戦う相手を見分けることはそれほど困難ではない。しかし、同じ国民で異なる思想を持つ者は、可視的な印がないだけに容易に見分けることができない。「ある日自分が容疑者のなかにいるかもしれないということから誰も免れない」(104)という署長パウルス (Paulus) の言葉が示すように、敵味方の境界はあいまいである。

警察の政治部では、自白させるために政治犯の容疑者を拷問する。しかし、拷問という権力行使が警察の上層部あるいは国家から命じられているわけではない。警察の専属医であるクレメンス (Clemens) は署長のパウルスに容疑者を慎重に扱うように忠告しているし、容疑者マーティ (Marty) が拷問の末に死亡したことは上層部の機嫌を損ねたとパウルスが語っている。上層部が要求しているのは首謀者を検挙することであり、拷問ではない。政治部のメンバーも最初は自白させることを目的に拷問を始めたはずである。しかし、拷問者と容疑者との間に権力関係が生まれ、相手を屈服させ従属させるといった欲求を満足させるための手段として暴力が行使されるようになる。容疑者マーティの場合、どんなにひどい拷問を受けようが首謀者の名前を白状せず、あるいは拷問から逃れるために嘘の供述をすることもない。彼は警察が行使する暴力によって身体的に征服されてはいるが、権力に屈しているわけではない。暴力が必ずしも権力関係における優位をもたらすわけではないことが示される。

警察での拷問が法で罰せられないという事実は、国家秩序を守るといった大義のための暴力が容認されていることを示す。しかし、その大義も倫理的な正当性が与えられるものではない。倫理的に拷問を正当化するためには、被拷問者を侮辱するに足る他者として差別化する必要がある。そのため警察は政治犯の容疑者を非人間化する。パウルスは「同情なんかなくていい。容赦なく打ちのめさなければならぬ害獣なんだから」(76) と言い、相手を非人間化することで暴力による権力行使を正当化する。彼は、「肝心なことは俺たちの側に正当性があるってことだ。正当性さえあれば、どんな手段を使っても関係ない」(123) と訴える。彼らの

正当性は相手に「害獣」という烙印を押すことによって後から構築されたものである。

非人間として拷問されることを恐れるダニエルは上司パウルの命令に背くことができない。彼らは「おやっさん (Papaíto)」「息子 (Hijo)」と呼びあう仲であり、擬似的な父子関係にある。ダニエルはパウルスを尊敬し、絶対の信用を置いている。ダニエルにとって職務の遂行は父であり上司であるパウルスへの忠誠であった。しかし、ルシーラからメアリーへ、メアリーからダニエルへと伝えられた拷問の本質、人間のサディズムについての真実がダニエルとパウルスの関係を変えていく。

ダニエルは長い間警察においてイデオロギー操作をされてきたが、メアリーの影響で警察内での不当な暴力およびサディズムを強く意識するようになる。夫婦はまず警察という空間から抜け出すことを考える。メアリーはダニエルに辞職するよう嘆願するが、勇気のないダニエルは長期の休暇願いを申し入れるにとどまる。しかし、願い出るたびにダニエルは説得されて職場に戻る。彼は病気を理由に休暇を願い出るが、それは自分の首を絞めることだとパウルスに忠告される。抑圧する側（警察官）は健康で、抑圧される側（政治犯）は病気であるという同意が警察には存在している。したがって、抑圧する側にいる者でも自分が病気であることを認めれば反逆者として拷問される危険がある。実際には、抑圧する側にいる警察の同僚全員が身体の不調に悩まされており¹³⁾、支配—被支配関係の境界線上で不安に怯えている。拷問を実行したことが原因で病気になった者が、病気の治癒のために休暇や退職を望んでも、反逆者にされないためには病気を申告することはできない。病気でないことを証明するために拷問の継続を余儀なくされ、その結果病気になるというメビウスの輪のようなシステムが存在する。

しかし、真実を受け入れたダニエルは拷問を犯罪と呼び、パウルスを歪んだ偽善者、そして最も病んだ人間であると非難する。この権力関係の逆転に際し、パウルスはダニエルに脅迫という暴力を用いる。拷問される側に回される可能性の恐怖を示唆することで部下の力を抑えようとする。警察から抜け出すことが不可能であると考えたダニエルは海外勤務を嘆願する。パウルスはダニエルの海外転勤を承諾し、異動日までの勤務という名目で職場に戻らせる。つまり、相手に理解を示し、相手の要求を受け入れるポーズを見せることで、再び優位に立ち相手を支配する。ダニエルは国外に出れば警察権力および国家権力から逃れられると考える。しかし、メアリーの言うように、「どこに行こうと、別のパウルスが待っている」(119)のである。「この仕事から抜け出すためにはどうしても署に戻らなければならない」(119)と言うダニエルは永遠に抜け出すことのできないシステムの中に取り込まれている。このダニエルの悪の循環を終わらせるのはメアリーによる射殺という暴力である。彼女の暴力は国家権力にとっていかなる意味を持つのか。

6. 国家権力への抵抗手段としての暴力—作者のジレンマ

ダニエルは上司に海外勤務の要求を受け入れさせたことで、権力関係において自分が優位に立ったと信じる。そして彼はパウルの欺瞞やサディズムを暴き、長年受けてきた抑圧への抵抗を試みたことで自信を取り戻す。男性機能の回復を予感するダニエルは、メアリーを求めるが、彼女は夫を他人だと言って拒絶する。抑圧構造である家父長制的イデオロギーから離脱したメアリーにとって、抑圧構造の歯車であり続けるダニエルは他者となる。ダニエルはパウルスに海外勤務を約束させるが、それは国家権力からの逃避であっても抵抗ではない。ダニエルが警察という権力機構から抜け出すことは永遠にないとメアリーは考え、最後には彼を射殺する。

作者ブエロは、警察での暴力あるいはメアリーのルシーラに対する暴力を批判的に描いている。権力行使の手段としての暴力に批判的な態度を示す作者が、メアリーの抵抗の手段に暴力を選択したのはなぜか。女性であるメアリーが男性である夫を男性の武器である拳銃で殺す。つまり被抑圧者（＝女性）が抑圧者（＝男性）に抵抗するために抑圧者の支配手段を用いるのである。被支配者が支配者の手段を行使することが権力に対する抵抗となり得るのか。ブエロは暴力による抵抗について次のように語る。

私の演劇ができるだけ平和的で、できるだけ暴力的ではない歴史的発展を間接的に擁護していることは疑いのないことだ。しかし、歴史的暴力¹⁴⁾は時として必要なものであり、それを作品内で完全に拒否することはできない。(1994: 484)

暴力以外に方法がない場合、社会構造改善の手段として暴力行使もやむを得ないという見解である¹⁵⁾。ただ、「直接的あるいは間接的であっても、不可避の連帯責任によって我々皆が犯罪に関与していることを認めなければならない」(1994: 485)と主張する。国家が行使する拷問を批判するブエロ¹⁶⁾が、国家権力と同様の暴力を抵抗手段として使わざるを得ないことにジレンマを感じていたことは想像に難くない。しかし、独裁国家において逃避・傍観が何も生み出さない以上、暴力の犯罪性を認めた上で、暴力を用いても抵抗すべきであるとするブエロのまなざしが浮上する。したがって、マンチェスター大学出版の『バルミー博士の二つの物語』の序文でのBarry Jordanの指摘、すなわち、メアリーの殺人は精神のバランスを崩した人間の非合理的な精神異常の行為とも捉えられるが、一方でそれはダニエルおよび彼が取り込まれたシステムが与える脅威に対する理にかなった反応であり、圧制的な社会に抵抗する政治的な行為でもあるとの指摘(1995: 33)は正鵠を得ている。

しかし、メアリーの殺人は結果的には国家権力に抵抗する政治的行為になったが、意図され

たものではないことを確認しておかなければならない。彼女が以前患っていた神経症の症状は悪化しており、夫がはさみで息子を去勢しようとする夢と現実との区別がつかなくなり、朦朧とした意識のなかで夫を射殺するのである。つまり、夫殺しは家父長制のイデオロギーに支配されていた女性が自分の意志に反して家父長制というシステムから逸脱したために精神のバランスを崩したことに端を発している。そして、国家の権力行使の一方法である拷問の存在を知ることによって引き出された狂気が、国家権力の歯車である一人の人間を殺すに至ったのである。ここに見られるのは国家権力が自ら生産する、結果としての抵抗である。

ダニエルが政治犯の容疑者マーティを去勢する拷問をしたとき、その権力に対してマーティは物理的な抵抗は何もなし得なかったはずである。最後まで自白しなかったことが唯一の抵抗である。ダニエルとマーティの権力関係においてはダニエルが身体的に優位に立っているにもかかわらず、彼はマーティを去勢したのと同じように、自ら性的不能になる。彼が行使した暴力はそのまま彼の身体に跳ね返るのである。暴力を行使した者は自らの行為によって精神的苦痛を被り、その結果相手に同化する。メアリーの場合も同様にルシーラの苦悩に同化する。拷問の真実を語るルシーラを嘘つきと呼び、平手打ちを与えたメアリーは、ルシーラから無視あるいは軽蔑という抵抗を受ける。メアリーは喪服のルシーラと出会い、次のような会話をする。

メアリー そんなふうに行ってしまわないで！私には何も、何もできないけど……夫があなたのご主人にしたことに対して、私を許してほしいの。

ルシーラ （憤慨して）ご主人を許してほしいとおっしゃるのですか？

メアリー いいえ、私だって夫を許すことはできないわ。私のほうも、夫とはもう終わりよ。ルシーラ、私たち一緒に苦しむのね。

ルシーラ 一緒にですって。いいえ！私の苦しみは私のものです。あなたにはそれを共有する権利なんてありません。あなたは私のように警察本部に行くこともなかったし、これからだって行くことはないでしょう。（中略）（喪服を見せて）この喪服がどんなものなのか、決して理解することもないでしょう。（117）

そして、最終的にはメアリーは夫を亡くし喪に服すると同時に警察本部に連行される。まさしくルシーラと同じ苦しみに耐えることになる。

同様に、拷問を行使する国家権力は、自らが行使した暴力の跳ね返りによって優勢から劣勢へと追い込まれるのである。メアリーによる夫殺しは国家権力への抵抗ではあるが、それは意図的なものではなく、国家権力自らが誘発した抵抗なのである。その抵抗が権力行使する側に痛みを与え、権力関係におけるその優位な立場を揺るがすためには、マーティやルシーラがそうであったように、権力を行使される側がシステムに取り込まれることなく、真実を知る力を

持つことが必要なのである。

マーティのダニエルへの、ルシーラのメアリーへの抵抗は決して暴力そのものではなかった。暴力を伴わない抵抗が権力関係における優劣を逆転することはすでに見てきた。マーティもルシーラも直接相手の身体に手を触れたわけではないが、結果的にダニエルもメアリーも自分が相手にもたらした状態を自分自身が引き受けることになる。では、なぜブエロは国家権力に亀裂を入れる抵抗にはあえて暴力を選択したのか。しかも、それは警察権力、あるいは男性権力を象徴する拳銃を用いた暴力なのである。国家体制に亀裂を入れるためには、ブエロがフランス革命を引き合いに出す「歴史的暴力」¹⁷⁾が必要であることを提示するためではないか。

しかし、ブエロは民衆の自由のためなら暴力もやむを得ないとしながら、「もちろん人を殺すべきではない」(Buero Vallejo 1994: 486)と説く。彼のダブル・スタンダードは作品の中でいかにして解消されるのか。作者はメアリーによるダニエルの射殺場面で、国家による拷問という暴力と、国家権力への抵抗のための暴力とが同質でないことを強調する¹⁸⁾。つまり、ピストルを構えるメアリーに自ら近寄っていくのはダニエルであり、彼がメアリーに感謝しながら死んでいくという演出により、メアリーの暴力が一方的で強制的な国家権力の暴力とは異質であることが示される。ベンヤミンは「互いに依拠しあっている法と暴力を、つまり究極的には国家暴力を廃止するときにこそ、新しい歴史的時代が創出される」(1969: 36)と論じる。メアリーの暴力は、法と密接に絡み合い決して罰せられることのない国家暴力の廃止に向けた、つまりは新しい歴史的時代を創出する抵抗となる。

7. おわりに

『バルミー博士の二つの物語』において作者ブエロは、母子、嫁姑、夫婦、教師と生徒という日常的な次元で機能する権力を描いた。フーコーは、「政治権力は、なにも国家の大きかりな制度の諸形態、われわれが国家装置と呼んでいるものの中にばかり存在するものではない。(中略)権力とは、どこかただ一ヶ所で機能しているのではなく、実にさまざまな場所で機能している。家庭、性生活、精神異常者の扱い、同性愛者の排除、男女関係、等々、これらの関係は全て政治的な関係」(2000: 57-58)であると説く。登場人物の個々の権力関係の演劇化は、政治権力の提示であり、国家権力とそれに対する抵抗を描くためのブエロの戦略であったと言える。

真に正当な理由を持たずして行う拷問の存在は、被拷問者にならないために拷問者となる者を作り、拷問者にも犠牲者にもならずにすむように沈黙する者を作り出す。このような社会を変えるためには、国家権力に対する抵抗が必要となる。しかし、その抵抗は抑圧された者の力を集結して戦うというものではない。フーコーが論じるように「権力のある所には抵抗がある」のであり、「抵抗は権力に対して外側に位するものでは決してない」(1986: 123)のであ

る。したがって、権力が行使されると同時に抵抗が生み出されている。その抵抗が権力を行使する側の優位な立場を揺るがす力を持つためには、行使される側が真実を知り、それを正面から受け入れる必要がある。祖母の現実逃避による無知、カップルの現実否定による無知が彼らを拷問の共犯者にしたように、無知であることは国家権力への有効な抵抗を不可能にする。

題名の“*doble historia*”（ダブルの物語）とは、現実を否定し、常に笑顔でいようとする自己欺瞞のカップルを主人公とする最初の物語と、警察で拷問を行うダニエルとその妻メアリーをめぐる悲劇的な二つ目の物語を指す。バーネス一家の悲劇を生み出すのは最初の物語のカップルのような拷問の共犯者である。したがって、最初の物語がなければ二つ目の物語は存在しない。また、拷問をやめない限り、自己防衛のために現実逃避、あるいは現実否定する者が生み出される。拷問を正当化する警察システムから抜け出す勇気のないダニエルのような人間が最初の物語のカップルのような人間を作る。すなわち、二つの物語は別々に存在するのではなく「ダブル」であり、独裁国家の陥る悪の循環を象徴する。カップルをバルミーの物語内に取り込む劇構造や、メアリーがダニエルを殺すことによる権力への抵抗は、悪の循環に亀裂を入れるものであり、国家権力解体に向けての作者ブエロ・バリェホの抵抗を表す。

注

- 1) フランコによる独裁制は1939年からフランコ死去の1975年までの36年間である。
- 2) 初演は1968年のイギリス、その後、1971年には米国のベルモントで上演される。
- 3) 1995年発行の *La doble historia del doctor Valmy* の Introduction で Barry Jordan は家父長制社会において抑圧されるメアリーについて論じている (1995: 32)。
- 4) 以後、原書からの引用の場合はアルファベットで、翻訳本からの引用の場合はカタカナで著者名を記す。また、原書からの引用の訳文はすべて拙訳である。
- 5) ダニエリート (Danielito) とはダニエル (Daniel) の縮小辞であり、日本語でいえば「ダニエル君」になる。「祖母」の息子ダニエルも幼少時にはダニエリートと呼ばれていた。
- 6) 作品の引用は、Antonio Buero Vallejo, 1996, *La doble historia del doctor Valmy / Mito*, 4^a ed., Madrid, Espasa-Calpe, S.A. からである。以後、本書からの引用は頁数のみを記すことにする。訳文はすべて拙訳による。
- 7) ダニエルは母親には心配をかけたくないと言い、警察での仕事が精神的・身体的な支障を与えていることを隠す。111ページには、愛情いっぱい母親とぴったりと寄り添い、メアリーを無視して奥の部屋に入っていくダニエルが描かれている。
- 8) Payeras Grau は、メアリーが夢の中でハサミを手にしたダニエルに自分を刺すように言うのは、夫の不能が原因の性的欲求不満の表示であると論じる (1987: 62)。
- 9) コンネルは、レイプは「権力の不平等および男性が至上権をもつとするイデオロギーのなかに深く埋め込まれた暴力がとる対人的な形態」であり、「社会秩序からの逸脱ではなく、むしろその補強物」であると論じる (1993: 172)。
- 10) Iglesias Feijoo は、出血しないのは、ハサミが武器であるだけでなく男性性器の象徴でもあるからだと論じる。メアリーが「傷つけてちょうだい！あなたが望むなら私を刺して！」と言う時、そこには恐怖ではなく欲望が表現されていることから明らかにハサミが男性性器を象徴すると分析する (1982: 334)。
- 11) 1963年、共産党役員であり内戦時に共和国政府軍の軍人であったフリアン・グリマウ (Julián Grimau) が、内戦中の軍事的謀反という25年前の罪で逮捕され、拷問された後、銃殺されるという事件が起きている (Jordan 1995: 17-18)。また、同年、アストゥリアス鉱山でのゼネストで、鉱夫

- やその家族が警察の拷問により殺されたという訴えがあり、それに対する調査を求めて、ブエロをはじめとする知識人101名が署名している (O'Connor 1984: 89)。
- 12) この点については拙論、「もうひとつの歴史を叙述するアントニオ・ブエロ・バリエホの戦略：国家のイデオロギーを可視化する『バルミー博士の二つの物語』」(岡本 2004: 139-169)を参照されたい。
- 13) ダルトン (Dalton) は頭痛もちで、4時間おきに注射をしなければならず、熱のために倒れることもある。ボルスキー (Volski) は胃痛に苦しみ、ポズナー (Pozner) は每晚叫び声をあげて目を覚めます。署長のパウルスもしばしば指で臉を押さえるしぐさをし、いかにも疲れた様子である。
- 14) ブエロはフランス革命でみられたような体制転覆の力を持った被抑圧者たちの暴力を歴史的暴力と呼ぶ。
- 15) ベンヤミンは、「自然法は、正しい目的のために暴力的手段を用いることを、自明のこととみなす」とし、自然法が「フランス革命のテロリズムの、イデオロギー上の基礎となった」(1969: 9)と記す。フランス革命における暴力を肯定するブエロには自然法的な見方があったと考えられる。
- 16) “Sobre la tortura” (「拷問について」) (Bueno Vallejo 1994: 1278-1281), “Nunca más torturar” (「決して二度と拷問は」) (Bueno Vallejo 1994: 1281-1285)を参照されたい。
- 17) “Sobre la violencia en mi teatro” (「私の演劇における暴力について」) (Bueno Vallejo 1994: 480-487) 参照。
- 18) ブエロの研究者 John Lyon は、「ブエロにとって不正な抑圧に対する答えは、消極的な抵抗にあるのではなく、コントロールされた行動と、必要な暴力と根拠のない残虐行為とを区別することにある」と論じる (1996: 137)。

参考文献

- ヴァルター・ベンヤミン「暴力批判論」『ヴァルター・ベンヤミン著作集1暴力批判論』晶文社、1969年。
- Bueno Vallejo, Antonio, 1996, *La doble historia del doctor Valmy/Mito*, 4ª ed., Madrid, Espasa-Calpe, S.A.
- _____, 1994, *Obra Completa II Poesía, narrativa, ensayos y artículos*, Madrid, Espasa-Calpe, S.A.
- ロバート・W・コンネル『ジェンダーと権力 セクシュアリティの社会学』三交社、1993年。
- Doménech, Ricardo, 1993, *El teatro de Bueno Vallejo: una meditación española*, 2ª ed., Madrid, Gredos, S.A.
- ミシェル・フーコー『性の歴史 I 知への意志』渡辺守章訳、新潮社、1986年。
- _____, 『ミシェル・フーコー思考集成VII 知/身体』蓮實重彦・渡辺守章監修、筑摩書房、2000年。
- Iglesias Feijoo, Luis, 1982, *La trayectoria dramática de Antonio Bueno Vallejo*, Santiago de Compostela, Universidad de Santiago de Compostela.
- Jordan, Barry, 1995, “Introduction” en Antonio Bueno Vallejo, *La doble historia del doctor Valmy*, Manchester and New York, Manchester University Press, pp.1-43.
- Lyon, John, 1996, “Bueno Vallejo y el tema de la violencia” en *El teatro de Bueno Vallejo: homenaje del hispanismo británico e irlandés*, ed. Victor Dixon y David Johnston, Liverpool, Liverpool University Press, pp.127-139.
- Newman, Jean Cross, 1992, *Conciencia, culpa y trauma en el teatro de Antonio Bueno Vallejo*, Valencia, Albatros Hispanofila Ediciones.
- 岡本淳子「もうひとつの歴史を叙述するアントニオ・ブエロ・バリエホの戦略：国家のイデオロギーを可視化する『バルミー博士の二つの物語』」『EXORIENTE第11号』大阪外国語大学言語社会学会、2004年、pp.139-169。
- Payeras Grau, María, 1987, “Complejidad dramática y trasfondo ético en el teatro de Bueno Vallejo (a propósito de dos dramas de intención política)” en *Anthropos 79 Extraordinario-10 1987*, Barcelona, Editorial Anthropos. Promat, S. Coop. Ltda., pp.58-63.
- 上野千鶴子『家父長制と資本制 マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店、1990年。

Power of Nation and Resistance in Antonio Buero Vallejo's *The Double Story of Doctor Valmy*

Junko OKAMOTO

Abstract

The Double Story of Doctor Valmy, Spanish playwright Antonio Buero Vallejo's 1964 work, has its focus on tortures of the Police. On the face of it, the playwright shows the actual circumstances of the nation and criticizes the Power of Nation. But his intent lies in suggesting the possibility of resistance by describing the instability and reversibility of any power relation. To consider what enables the reversal of power in terms of power relations between characters is a task here in this paper: such a challenging task demonstrates the relation between the Power of Nation and the resistance against it.

First, the heroine suffers from patriarchal oppression which is closely related with gender identity and sexuality. But her sense of inferiority to her husband and her mother-in-law undergoes a drastic change when she knew the tortures in the Police. The reverse of power comes from her transformation - from ignorance to realization of the truth.

Secondly, ignorance produces accomplices of torture: those who are/act blind to and deny realities make any resistance against the Power of Nation impossible.

Thirdly, execution of power takes a form of torturers in Power and their violence. Rulers/torturers inscribe the marks of "invalid" and "nonhuman" on the ruled/tortured to justify their violence. Justice is not justice a propri: it is performatory.

Finally, this paper explores the relation between violence and resistance. Execution of power, as Michel Foucault says, produces resistance. To make the resistance effective, it is important to be well aware of the system one lives in and to know the truth which the system makes unknowable. The heroine's murder of her husband is one form of resistance which the Power of Nation produces. Her husband, as a cog, forms a part of the system and killing him creates a void in the economy of Nation's violence.

Keywords: Power, Resistance, Patriarchy, Realization of Truth, Violence